

環境美学は、19世紀以来の美学がその考察対象を芸術作品に限ったことへの反省として、また環境問題の深刻化への美学からの応答として、1960・70年代の英米圏を中心に勃興した。代表的論者アレン・カールソンの主張は、<適切な自然の美的鑑賞には、自然に関する知識すなわち常識的／科学的知識（以下、知識）が必要である>と定式化されうる。この主張に対して、批判・修正といった様々な応答が繰り広げられた。その意味で、カールソンのこの主張こそが、環境美学の発展を促したと言える。ゆえに、彼の議論を正確に理解することは、当該分野における議論全体の整理に寄与する。

本発表では、1970・80年代の論稿において彼が論じた「自然環境モデル(the natural environment model)」を中心的に検討する。このモデルにおいて彼は、彫刻作品や絵画などの芸術作品を模範として自然を鑑賞する態度を脱し、「自然を自然としてみる」ためには、鑑賞者が自然環境内の要素や体系に関する常識的／科学的知識を得る必要があると論じた。知識を得ることで、鑑賞者は鑑賞対象が属する正しいカテゴリー（科学的分類）を把握することができる。そして彼に従えば、正しいカテゴリーの把握は、以下の二つの種類の美的性質を明らかにすると発表者は解釈する。

第一に、正しいカテゴリーのもとで知覚されることで、対象の持つ特定の非美的性質（大きさ・色などの物理的性質）に伴う美的性質（“雄大さ”など）が明らかになる。この場合の美的性質は、実際に鑑賞対象が持っている、我々にとって知覚可能な非美的性質に基づいている。

これに対し第二の美的性質は、知識なしでは知覚しえないような、鑑賞対象とそれが属する環境との関係性に基づいている。カールソンは、正しい科学的分類は我々に対して世界を理解可能なかたちで示すものであり、しかもその営みは、秩序や規則性といった美的によい性質に訴えることで達成されると主張する。この主張は、正しい分類によって自然物や風景の自然界における位置が明確化され、この明確化が鑑賞対象にある種の美的性質を与えるということを意味する。1993年に彼が提唱した自然鑑賞理論である「秩序による鑑賞(order appreciation)」は、この第二の美的性質がもつ内実のより明確な規定である。「秩序による鑑賞」では、知識が自然界の秩序を明らかにし、鑑賞対象に意味や重要性、美といった（彼が言うところの）美的性質を与えると主張されるのである。

本発表では最後に、フランク・シブリーに端を発する美的性質をめぐる諸議論の中に、カールソンの論を位置づける。しかし、それらの議論が芸術作品をその典型的な対象として構築された一方、自然の事物は一般的な芸術作品とは異なり、刻々と姿を変えていく。本発表では最後に、自然のこの特徴が我々にもたらす美的性質について、芸術の場合と同様の仕方での美的性質について考えるカールソンの議論では十分には捉え尽くせないことを指摘する。